

# 元明の〈没〉と〈没有〉についての一考察

渡 部 洋

## はじめに

元明期の〈没〉と〈没有〉については先人の研究により大方明らかにされているが、問題点がまったくないわけではない。例えば香坂氏は“〈没〉で注意すべきことは〈没有〉という形のものが「水滸伝」をはじめ元代明初のものにはまだ少なく、〈没〉が優勢であったということである。〈無有〉から〈没有〉へと自然な移行をみせず〈無〉〈没〉／〈無有〉〈没有〉の両者が平行し徐々に〈無有〉が脱落して行ったようである。”と述べられており、更に別の個所でも“旧白話を見ると宋元代、明代の初期では総合的な〈無〉の使用が少なくなり一般にこれにとって代わって〈無有〉がまた同時に〈没有〉〈没〉が平行して多くな<sup>①</sup>ってきている。”と指摘され、「竇娥冤」や「水滸伝」の用例を示されている。氏は恐らくこれらの元曲選の作品や「水滸伝」等の用例を根拠として述べられているのだろうと思うが、挙げられている「竇娥冤」の用例は元曲選の底本になったと思われる内府本系諸本の古名家本には見られない臧晋叔が改作した部分のものであり「水滸伝」も成立年代を特定するのが難しい資料である<sup>②</sup>ことを考えれば、こうした用例を根拠にして〈没〉や〈没有〉について断定することは無理であるように思われる。太田氏は〈没有〉の形成時期については宋元の頃ではないかとされ断定を避け<sup>③</sup>後考を待つとして「警世通言」と「救風塵」の用例を挙げられている。「警世通言」は確かに宋代の話本を集めたものであるが編纂されたのが明代後期であるから書き換えられた可能性もある。また「救風塵」の用例は内府本系<sup>④</sup>諸本の古名家本に見られるが古名家本も明代に入って成立したものである。こうしてみると太田氏が後考を待つと述べられているように〈没〉や〈没有〉について検討すべき点は多分に残されているように思われる。最近の資

## 2 (渡部)

料研究の進展や新しい資料の発見等からもう一度この問題について見直し、様々な可能性を見出すべきではないだろうか。小論ではその可能性を見出す試みの1つとして最近発見された「旧本老乞大」と筆者の目にすることのできる宋代と元代の信用しうる資料から所有存在の否定を表す否定詞を抽出し、その用例を検討することによって〈没〉と〈没有〉の使用状況について考察してみたいと考える<sup>⑤</sup>。

尚、各用例に示す( )はその所在を表す。

### I 「旧本老乞大」に見る〈没〉

元代と明代は隣り合わせの時代であるから〈没〉と〈没有〉について調査する場合そのテキストはできるだけその時代の言語を反映したのものを使ったほうが効果的であることは疑い得ない。最近「旧本老乞大」(以後「旧本」と略称)が発見され慶北大学校で出版されたが、この「旧本」がその使用されている言語から原本にちかいものであることはほぼ確実であるため、ここではこの「旧本」を含めて4種類ある「老乞大」のテキストの中からこの「旧本」と1480年-1483年頃の改訂版かもしくはそれに近いものであろうとされている奎章閣叢書第9「老乞大諺解」(以後奎章閣と略称)を取り上げ、その比較を通じて元代と明代の違いをみてみたい<sup>⑥</sup>。

「旧本」では〈無〉を29例見るが奎章閣では5例見るのみとなっている。このように〈無〉の数が多いのは「旧本」での〈無〉が奎章閣では〈没〉或いは〈没有〉に替えられているからである。下記の表はその替えられた個所を抜き出したものである。

「旧本老乞大」	→ 奎章閣「老乞大」
無人家(6)	→ 没人家(17)
席子無(14)	→ 席子没(45)
無甚麼錢本(15)	→ 没甚麼錢本(48)
無甚麼忙勾當(17)	→ 没甚麼忙勾當(54)
無井那怎麼(20)	→ 没井阿怎麼(64)
無甚店子(22)(22)	→ 没甚麼店子(70)(71)
怕無時(23)	→ 怕没時(73)
別箇菜都無(23)	→ 別箇菜都没(73)

無處安下(26)	→	沒處安下(83)
無糶的米(30)	→	沒糶的米(96)
無甚明火(31)	→	沒甚麼火(101)
無甚備細(41)	→	沒甚麼備細(134)
無人(43)	→	没人(140)
無來由(45)	→	沒來由(146)
裏頭無一張兒歹的(47)	→	裏頭沒有一錠兒低的(153)
外無懸欠(48)	→	外沒欠少(157)
別無甚買賣(50)	→	別沒甚買賣(165)
無阿做甚麼買賣(55)	→	沒時做甚麼買賣裏(182)
無盤纏(63)	→	沒盤纏(211)

この2種類のテキストの違いには元代の口語においてはまだ〈無〉が多用されていたが明代になってからはあまり使用されなくなってきたことが示されているのではないだろうか。「旧本」では〈没〉が28例見られ〈無〉とほぼ同数であるが〈没有〉は見られない。一方奎章閣では〈没有〉の用例が4例見られるがその内2例は同じものを「旧本」では確認できなかった。あとの2例は下記に示す通り「旧本」の中ではそれぞれ〈無〉と〈没〉が使われていた。

上下衙都没有(奎章閣 142)

官星没有(奎章閣 225)

如令爲没賣的(旧本 40)

如令爲没有賣的(奎章閣 132)

裏頭無一張兒歹的(旧本 47)

裏頭沒有一錠兒低的(奎章閣 153)

この2種類のテキストの比較から以下の点が明らかになった。

- 1 「旧本」では存在, 所有の否定詞として〈没〉と〈無〉がほぼ同じ割合で使用されている。

#### 4 (渡部)

2 「旧本」には〈没有〉の用例が見られない。

3 奎章閣では存在、所有の否定詞のほとんどが〈没〉となっている。

4 奎章閣には〈没有〉の用例が見られる。

「老乞大」のテキストのこうした比較結果は元代の口語においては〈無〉が〈没〉と同じように多用されていたが明代では〈無〉があまり使用されなくなったことを示しているように思われるが、「老乞大」は当時の初級中国語の教科書のようなものでこれだけで元明の〈没〉と〈没有〉について述べるには不十分であるため次に元雑劇の資料における〈没〉と〈没有〉についても考察してみたいと思う。

## Ⅱ 元雑劇に見る〈没〉と〈没有〉

ここでは次の三種類の元雑劇のテキストを使用する。

### 1 元刊雑劇三十種

2 内府本系諸本（主に脈望館鈔本 古名家本 息機子等がある。）

### 3 元曲選

元刊本である「元刊雑劇三十種」は元代の言語で書かれているので以後「元本」<sup>⑦</sup>と略称する。また内府本系諸本は明代の嘉靖年間頃（1522年～66年）宮中での上演用に作られたテキストに基づくもので元代のテキストに相当手が加えられたものと考えてよい。明代前期の言語が反映しているものと考え、これについては以後「明本」とよぶこととする<sup>⑧</sup>。元曲選は明代後期に臧晋叔が内府本系諸本を改作したといわれるほど手を加えたものであるから彼の改作部分は明代後期の言語が反映しているものと考えられる<sup>⑨</sup>。

これら3種類のテキストを使って〈没〉及び〈没有〉について考察を進めるが、対等な〈無〉〈無有〉も加えたほうが〈没〉〈没有〉の出現状況の違いをよりよく把握できると思うので〈無〉及び〈無有〉も含めてみていくことにする。

「元本」：〈没〉と〈無〉は見られるが〈無有〉〈没有〉は見られない。

〈無〉については目的語が俗な言葉であっても〈無〉を使用した用例があり、しかも多用されている。

合着鍋沒錢買米柴，忍着餓無鹽少薺菜。(元本「看錢奴」第二折)

沒些君臣義分，只有子母情腸。(元本「李太白」第一折)

慌得來無巴臂，不會三年乳哺，一割台肥。(元本「李太白」第三折)

怕有錢時截取疋整布絹，無錢時打我条孝系腰。(元本「鯁直張千」第三折)

「明本」：〈没〉〈無〉〈無有〉〈没有〉すべて見ることができ〈無〉も〈没〉と同様に多用されている。〈没有〉や〈無有〉の用例は〈没〉や〈無〉に比べると数としては少ない。

想才郎沒半米兒塵俗性。(古名家本「紅梨花」六 a2 十三)

這個四幅羅衾沒巴臂。(古名家本「青衫泪」十五 a1 四)

心中要敲他一下，不想又沒甚麼人錢。(古名家本「青衫泪」二十三 b5 四)

你這等說大言，我也無那飯錢也無那錢鈔與你。

(脈望館鈔本「裴度還帶」2 六)

我自離了寫卷市，無半星兒點點，一抹兒瑕疵。

(古名家本「風光好」10 二十四)

存孝無分曉，親兒落馬裝殺了親娘，如何不疼。

(脈望館鈔本「哭存孝」2 十六)

母親您孩兒和媳婦兒沒有手帕拜母親幾拜。

(脈望館鈔本「陳母教子」二十九 a3 二)

粉房里沒有呵。(古名家本「救風塵」十一 b2 一)

賭房里沒有呵。(古名家本「救風塵」十一 b3 一)

這里街上沒有賣甲頭的。(古名家本「羅李郎」十九 b4 五)

你顯將出來。(馬丹陽云) 並然無有。(脈望館鈔本「任風子」5 十一)

無有，可那里去子。(古名家本「救風塵」1 七)

至如我無有錢呵。(古名家本「岳陽樓」5 二)

俺弟兄兩人學成滿腹文章，待去上朝取應，爭奈無有盤纏

(古名家本「羅李郎」5 一 九 十八)

「元曲選」：内府本系諸本よりも〈没〉や〈没有〉が多用されている。作品の種類や手を加えた程度によって〈没〉の増加数に差はあるが、全体的に「元曲選」では〈没〉の増加が顕著である<sup>⑩</sup>。例えば「竇娥冤」の場合古名家本3例に対し、「元曲選」は13例とその差は歴然としており、さらに「元曲選」には2例の〈没有〉も確認できた。この「竇娥冤」については古名家本の〈没〉の用例はすべて元曲選にも見られるから10例の〈没〉と2例の〈没有〉が元曲選で加えられたことになる。

枉着你煩惱沒理會人生死是輪迴。(古名家本「竇娥冤」九 b6 一唱)

我做了箇銜冤負屈沒頭鬼。(古名家本「竇娥冤」十二 a8 一唱)

沒來由犯王法。(古名家本「竇娥冤」十二 b10 一唱)

我數次索取，那竇秀才只說貧難，沒得還我。(元曲選「竇娥冤」1499)

我婆媳又沒老公，他爺兒兩個又沒老婆，正是天緣天對。

(元曲選「竇娥冤」1502)

我想這婦人每休信那男兒曰，婆婆也怕沒的真心兒自守。

(元曲選「竇娥冤」1503)

兀的不是俺沒丈夫的父女下場頭。(元曲選「竇娥冤」1503)

難道你娘家也沒的。(元曲選「竇娥冤」1509)

這都是我做竇娥的沒時沒運，不明不闌，負屈銜冤。(元曲選「竇娥冤」1510)

若沒些兒靈聖與世人傳，也不見得湛湛青天。(元曲選「竇娥冤」1510)

沒來由填做我犯由牌，到今日官去衙門在。(元曲選「竇娥冤」1516)

你再尋思咱，俺家裏又不是沒有飯吃，沒有衣穿。(元曲選「竇娥冤」1502)

このほか元曲選では内府本系諸本の〈無〉や〈無有〉が〈没〉或いは〈沒有〉を使った表現に変えられている用例も見られる。

俺這店裏下着箇雙無目的大漢，房舍飯錢都無。

(脈望館鈔本「燕青搏魚」3 七)

俺這店里下着箇瞎大漢，欠下房舍飯錢，一些沒有。

(元曲選「燕青搏魚」1 231)

兄弟，我便殺他，無刀器。(脈望館鈔本「燕青搏魚」3 二十七)

兄弟，我便要殺他，也沒的刀那。(元曲選「燕青搏魚」1 242)

眼里無珠處，我須知近辯賢愚。(古名家本「牆頭馬上」2 二十一)

雖然是即中沒的珍珠處，也須知略辯個賢愚。(元曲選「牆頭馬上」1 346)

嗜家無有錢鈔，打官司使些甚麼。(古名家本「蝴蝶夢」1 四)

這事少不得吃官司，只是咱家沒有錢鈔，使些甚麼。

(元曲選「蝴蝶夢」2 634)

教我兩下里難顧瞻，百般里無是處。(古名家本「蝴蝶夢」1 十唱)

教我兩下里難顧瞻，百般里沒是處。(元曲選「蝴蝶夢」2 638)

哥也，我也是屈招了，並無有。(古名家本「勘頭巾」8 八)

哥，我也是屈招了的，委實沒有。(元曲選「勘頭巾」2 672)

我這里低首尋思，多應是受拷打無也，無那半點兒心慈。

(古名家本「勘頭巾」8 十二唱)

我這裏低首尋思，多應被拷打無也，全沒那半點兒心慈。

(元曲選「勘頭巾」2 674)

以上3種類のテキストへの考察を試みた結果次のようなことがわかった。

- 1 〈没〉や〈無〉は3種類のテキストすべてに見ることができるが、〈没有〉及び〈無有〉は「元本」にのみ見られない。
- 2 「明本」及び元曲選には〈没〉〈無〉〈没有〉〈無有〉すべてが見られるが、〈没〉及び〈没有〉については「元曲選」の使用頻度が「明本」より高くなっている。

元代の確実な資料である「旧本」と「元本」に〈没〉や〈無〉はあるが

〈沒有〉や〈無有〉は見られない。この点だけを見れば元代に〈沒有〉や〈無有〉はなく明代にはいつて〈無有〉や〈沒有〉があらわれたようにも思われる。しかし〈無有〉については香坂氏が「朱子語類」の用例を挙げられており〈沒有〉についても太田氏が「警世通言」の用例を挙げこの〈沒有〉は宋元期にあらわれたのではないかと推測されている。これらについて明確にするためにも〈沒有〉〈無有〉に関しては更に調査する必要がある<sup>⑪</sup>と思われるので、次節においては宋元時代の〈沒有〉及び〈無有〉について考察を試みたいと思う。

### Ⅲ 宋代と元代の〈無有〉と〈沒有〉

〈没〉が中世〈無〉に代替されるものとして使用され後に多用されたもので〈沒有〉が〈無有〉の中の〈無〉に替わって〈没〉が使われたものだとするとその〈沒有〉の前段階の〈無有〉が「旧本」や「元本」に見られても不思議ではないが両テキストとも所有存在の否定詞として使われているのは〈没〉と〈無〉だけであった。そこで元代、宋元期、宋代各時代の代表的な資料を使って〈無有〉と〈沒有〉について更に調査検討を加え当時のそれらの語彙の実態について考察したいと思う。

元代の資料として信頼できる「五代史平話」と「三国志平話」では〈無〉と〈没〉以外に〈無有〉の用例が見られた。但し〈沒有〉は無く〈没〉及び〈無有〉も〈無〉ほど多用されてはいなかった。

劉銖屠絶我家，我又屠滅其族，怨仇反覆，無有窮極。(五代周史平話204)

唐主畏陛下神武，事周無有二心。(五代周史平話242)

曹孟德驅兵百萬，猛將千員，挾天子之勢，諸候無有不懼者。

(三國史平話卷中809)

玄德，孔明，關公，張飛若來，無有不破者。(三國史平話卷中828)

元代より少し溯り宋元期の資料においてはどうかであろうか。「清平山堂話本」の諸作品や「永樂大典戲文」の作品には僅かではあるが〈無〉〈没〉以外に〈無有〉の用例が確認できる<sup>⑬</sup>。ただ「董解元西廂記」では「旧本」や元雜劇の「元本」と同じように〈無〉と〈没〉が確認できるだけである。



自古新人無有此等道理。(青平山堂話本 快嘴李翠蓮記 58)

陳巡檢爲因孺人無有消息，心中好悶。(青平山堂話本 陳巡檢梅嶺失妻記 129)

全無有風雲氣象，一謎里竊玉與偷香。(青平山堂話本 勿頸鴛鴦會 161)

首級無有鮮血染，望恩官乞賜明驗。(永樂大典戲文 小孫屠 第十一出)

沒一箇日頭兒心放開，沒一個時辰兒不掛念，沒一個夜夢見。

(董解元西廂記 卷一)

氣力又無些箇，與疋馬看怎乘坐。(董解元西廂記 卷二)

更に少し溯って宋代ではどうであろうか。南宋時代の資料としては「朱子語類」(以後「朱子」と略称)や「劉知遠諸宮調」(以後「劉知遠」と略称)がある<sup>15)</sup>が、その2つの資料をみると両資料とも〈没〉も〈無〉も共に確認できる。但し「劉知遠」では〈没有〉や〈無有〉が確認できないのに対し「朱子語類」には〈没有〉はないが〈無有〉は116個も確認することができる。

須大段用着工夫，無一件是合少得底。(朱子語類 學四 讀書法上 165)

看文字，正如酷吏之用法深刻，都没人情，直要做到底。

(朱子語類 學四 讀書法上 164)

後長立，弟兄不睦，知遠獨離莊舍，投託於他所，奈別無盤費。

(劉知遠第一場三葉)

身上單寒，沒了盤費，直是凄楚。(劉知遠第一場三葉)

無有滋味，只是人不曾子細看。(朱子語類 學二 總論爲學之方 141)

其知之所及者，則路徑甚明，無有差錯。(朱子語類 大學二 經下 302)

其知所不及處，皆顛倒錯亂，無有是處，緣無格物工夫也。

(朱子語類 大學二 經下 302)

此心常卓然公正，無有私意，便是敬。(朱子語類 論語二十六 憲問篇 1146)

此當思無有陰陽而無太極底時節。(朱子語類 周子之書 太極圖 2368)

以上の結果をまとめると南宋から元代までの資料については2つの種類に分けることができる。1つは所有存在の否定詞として〈無〉と〈没〉だけを使

用している資料であり、例えば「劉知遠」「董解元西廂記」「旧本」「元本」等がこれにあたる。もう1つは〈無〉と〈没〉以外に〈無有〉或は〈没有〉を使用している資料であり、例えば「朱子」「青平山堂話本」「警世通言」「永楽大典戯文」「五代史平話」「三国志平話」等がこのグループに属する。以後前者をAタイプ、後者をBタイプとして考察を進めたいと思うが、まずAタイプの資料に共通していることはすべてBタイプに比べ口語的で漢児言語が色濃く反映されているという点である<sup>16</sup>。このことから南宋から元の時代まで漢児言語では〈無有〉や〈没有〉を使わずもっぱら〈無〉や〈没〉だけを使用していたと考えられるのではなからうか。一方Bタイプでは各資料によって少し状況が異なる。〈無有〉は「朱子」に数多く見られるが「青平山堂話本」や「永楽大典戯文」「五代史平話」「三国志平話」では数が少なく〈没有〉は「警世通言」だけに見ることができる。これらの資料をここでは一応Bタイプとひとくくりにしたが、それぞれの作品に〈無有〉の数の偏りや〈没〉の使用頻度の違いが見られるので今後別の角度からこれらの資料については分析検討したいと思う。

### まとめ

拙論のⅠ及びⅡの考察から「旧本」や「元本」のような元代の漢児言語を色濃く反映する資料では所有存在の否定詞として〈没〉や〈無〉が専ら使われていたが、明前期の言語が反映していると考えられる内府本系諸本ではそうした〈没〉や〈無〉以外に〈無有〉や〈没有〉等も見られるようになり、さらに明代後期に成立した元曲選では内府本系諸本以上に〈没〉や〈没有〉が多用され優勢となったことがわかった。またⅢにおいて〈没有〉の前段階の〈無有〉について南宋から元代までの確実な資料を調査した結果Aタイプの「劉知遠」をはじめとする漢児言語が色濃く反映する資料に〈無有〉や〈没有〉はみられないが、Bタイプの資料では数の差こそあるが「朱子」「青平山堂話本」「永楽大典戯文」「五代史平話」「三国志平話」に〈無有〉の用例が見られ、また〈没有〉は「警世通言」だけに見られるということがはっきりとした。これらのことから次のような可能性が考えられないだろうか。南宋の時代から元代にはいるまで異民族に支配されていた北方の口語においては所有存在の否定詞は専ら〈無〉と〈没〉が使用されていたが、宋朝が支配する南方での口語においては〈無〉と〈没〉以外に〈無有〉も使用さ

れていた。その後南宋が滅び元が南北を統一すると北方の口語が優勢となったため今日目にする確実な元代の資料には〈無有〉が僅かに見えるだけとなった。しかし元の末には再び南方の官話が勢いをもちなおす。南宋時代の〈無有〉は北方官話の優勢さから元代の資料には僅かにしか見えないが、太田氏の言われる南宋期か或いは元代に南方の口語の中で〈没有〉が〈無有〉に替えられて使われるようになり明の全国統一後北京に遷都されたことによって南方にいた漢族が北方に移住しその結果北方での口語の中に〈無有〉や〈没有〉が使われるようになり明代の資料にも〈無有〉や〈没有〉が見られるようになる。そして明代後期になって口語では〈没〉が〈無〉よりはるかに優勢となり〈没有〉も多用されるようになった。

〈没〉や〈没有〉等の否定詞について大雑把に考察をおこなっただけで上記のような推測はもつべきではないかも知れないが1つの可能性として考えられるのではないだろうか。

#### 注

- ① 香坂順一「白話語彙の研究」(光生館 1983年) 203頁 135頁
- ② 内府本系諸本は明朝の宮中上演用のテキストを基にしたものであり古名家本(世界書局 1968年「全元雜劇」所収)は内府本系諸本の中のテキストのひとつである。これについては小松謙氏の「内府本系諸本考」(汲古書院 1991年「田中謙二博士頌壽記念中国古典戯曲論集」所収)に詳しい。
- ③ 太田辰夫「中国語歴史文法」(江南書院 1985年) 302頁
- ④ 「救風塵」のこの用例は古名家本(前掲「全元雜劇初編一」所収)と元曲選両方に見られる。  
 (小二) 粉房里没有呵? (周) 賭房里來尋。(小二) 賭房里没有呵? (周) 牢房里來尋。(古名家本「救風塵」第三折)
- ⑤ 「旧本老乞大」は98年に韓国慶尚道大邱で発見され「元代漢語本《老乞大》」(慶北大学校出版部古典叢書9 2000年)として出版された。
- ⑥ 「老乞大諺解・朴通事諺解」(聯經出版事業公司奎章閣叢書第9 1961年)
- ⑦ 「元刊雜劇三十種新校」(蘭州大学出版社 1988年)を主に使用し前掲の「全元雜劇」所収のものを参考にした。
- ⑧ 内府本の成立年代の特定については小松謙氏の論文「『脈望館鈔古今雜劇』考」(日本中国学会報 第五十二集 2000年)に詳しく内府本は嘉靖年間の頃、内府の鐘鼓司において上演された雜劇のテキストとされ于小穀本の中核は成化年間頃と論証されている。内府本系諸本(脈望館鈔本 古名家本 息機子本等)については前掲「全元雜劇」に収められているものを使用した。

- ⑨ 「元曲選」(中華書局 1989年)
- ⑩ 内府本系諸本と元曲選に共通する作品36種について調査した結果22種の作品に〈没〉の増加が確認できる。その中で増加が顕著な作品及びその〈没〉の数を表にすると次のようになる。

テキスト \ 作品	燕青博魚	冤家債主	魔合羅	竹塢聽琴	寶娥冤	羅李郎	看錢奴	還牢末	生金閣
脈望館鈔本	4	1						5	
古名家本			3	0	3	4		5	
息機子本							6		24
元曲選	14	7	15	5	15	8	13	9	33

- ⑪ 前掲①③
- ⑫ 「宋元平話集」(上海古籍出版社 1990年) 所収のものを使用し「三国志平話」については内閣文庫所蔵「至治新刊全相平話三国志」の複写で確認した。
- ⑬ 「清平山堂話本」(上海古籍出版社 1987年)  
「永樂大典戲文三種校注」(中華書局出版 1979年)
- ⑭ 「董解元西廂記」(人民文学出版社 1986年)を主に使用し『董解元西廂記諸宮調』研究(汲古書院 1998年)の本文編で確認した。
- ⑮ 「朱子語類」(中華書局 理学叢書 1986年)を主に使用し明成化九年刊本で確認した。  
「劉知遠諸宮調」については主に拙編「劉知遠諸宮調語彙索引」(好文出版 1996年)所収の影印本(文物出版社 1958年)を使用した。
- ⑯ 漢兒言語については太田辰夫氏が「漢兒言語について」(神戸外大論叢 5-3 1954年)の中で詳細に論証されている。

(本学助教授 中国文学)